

私の和歌山への提言——聞こえているかい、町の声

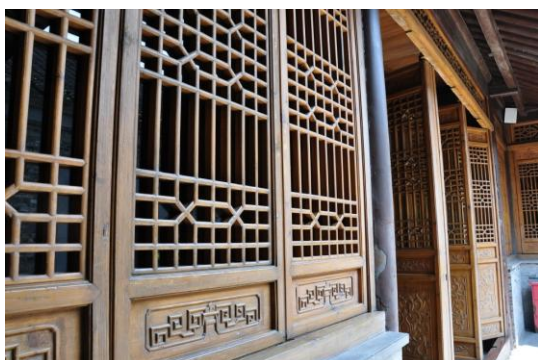
王 子怡

(中国・交換留学生・三東大学)

(揚州の萬花園↓)



(旧式の邸↓)



(お店↓)



「揚州ってさ、昔よりずっと没落しちゃったなあ」と、高校二年の頃、歴史の授業で友達が言っていた覚えがある。

約千年前揚州は、運河の開通により飛躍的に繁栄することとなった。唐代にはすでに今の上海のような国際港としての地位につき、貿易が発展していた。明代以降は塩の集積地としてとても重要な位置をしめ、文人を多く輩出しており、中国書画、料理、盆栽などの文化に大きく影響を与えた。

と、歴史のテキストにはそう書いてあるのだが、今の揚州は上海と比べものにはならないと思う。

現代社会における町の評価基準である経済力から見れば、揚州はまるで捨てられたような町で、歴史という先の見えない長い川の中で静かに、また気楽に浮かんでいる。それでも、私は揚州が大好きなのだ。

和歌山に来る前、中国の大学で和歌山市出身の一人の男の子と出会った。「出身地はどこですか」と訪ねてみると、彼はちょっと恥ずかしそうな顔をして「和歌山です。田舎なので、たぶん聞いたことがないでしょう」と答えてくれた。その時から、和歌山市は「どこ

に行っても畑しか見えない、もうボロボロになってしまった古い町」というイメージになってしまった。

(今年の和歌山城の夜桜↓)

今は、「田舎」の和歌山に来てもうすぐ一年になり、最初と比べると和歌山に対する私の気持ちも変わってきた。深く愛するとは言えないが、好きなのだ。

少し前のお別れ会で「どうして和歌山が好きな」と聞かれ、一瞬ボーとした。どうしてだろう。

それはもしかしたら、この町が、だれも見えないところで、優しい声で色々な物語を語っているからだろうか。

月光を浴びて、雪のように咲き乱れた夜桜の下で好きな人と散歩したこと。

バイト先で泣き出すまで怒られ、帰り道で元気いっぱいのヒマワリに励まされたこと。

通学道で、お花に水をやっているおばあちゃんに「おはよう、行ってらっしゃい」とちよっと濃い和歌山弁で挨拶されたこと。

秋になると、大通りの両脇に立っている楓がひらりと微かな香りのする葉っぱを落とし、この町を真っ赤にしたこと。

冬の大雪に降られて自転車で帰れないとき、一緒にいたおじいちゃんが「送ってあげようか」と声をかけてくれたこと。

コスモス満開の学校の裏坂道、密かに咲き誇っていた和歌山城のアジサイ、靴を履かないとちょっと足が痛くなる和歌浦のビーチ、ずっと登ると海も見える東照宮の本殿、一瞬で消えても心を動かすマリーナシティのミュージック花火。和歌山という町が活きていて、その優しい声がたくさんの人に感動を与えている。

(和大の裏坂道〈秋〉↑)

それでいいと思う。

東京、大阪のような経済繁栄の町はそれなりの素晴らしさを持っているが、それを目指して発展して行こうというのは本当にいいことなのだろうか。心までも温める温泉が、自然の呼吸を感じられる森が、疲れた旅人を癒すのは和歌山独特の魅力ではないかと思う。それを守りながら、経済力を少しずつ伸ばせばいいと思っている。

今の揚州は昔のように華やかではなく、古典文化を守りながら穏やかな気分で静かに生きている。春の夜空を照らす花火や町中のどこでも見られる夏のツツジなど、和歌山と同じ、優しくここで暮らしている人々を見守っている。勝手な考えだが、このままの静かさを生かし、この町の優しい声をもっとたくさんの人のところに届くように頑張っていく



ば良いと私はそう思っている。

(和大的裏坂道〈春〉↓)



(道路標識↓)

